

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04934

研究課題名(和文) 盲ろう者のコミュニケーション生成・変容過程の手話学的検討

研究課題名(英文) Sign linguistic analysis of tactile signing development by Deaf-Blind people

研究代表者

鳥越 隆士 (TORIGOE, Takashi)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：10183881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、盲ろう者による触手話の特徴を言語学的に解明するものである。先行研究の文献的検討と7名の居住地域の異なり、また経験の異なる盲ろう者の触手話による自然な対話資料を収集・分析をした。では、触手話を通常の手話言語の一変種とみなす立場と新たな言語の創出とみなす立場があった。では、まず触手話の分析的枠組みを検討した後、資料の分析を試みた。通常の手話言語の文法を触覚的に拡張している部分と視覚的な手話言語には見られない、独自の文法的な特徴の両者が見いだされた。ただ、盲ろう者自身による触覚の分析が必要であることがわかったが、コロナ禍の影響により、さらなる検討はできなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

手話言語は言語と認識されてきており、その言語学的解明が進められてきた。しかしながら、盲ろう者が用いている触手話については、福祉的な視点からの取り組みはあるものの、その学術的な検討がなされてこなかった。本研究は触手話の言語学的解明を試みたものである。言語資料を収集し、その文法的な分析が試みられたが、コロナ禍の影響で、中断せざるを得なかった。今後、盲ろう者自身による言語的な直感を含めた言語学的解明を進めることが求められる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate tactile signing by Deaf-Blind (DB) people from a linguistic point of view. Research reviews show two perspectives: one is that tactile signing is a variant of a signed language and the other is that tactile signing is a new language developed from a visual signed language. Natural conversational materials of tactile signing were obtained from 7 Japanese DB people having various experiences. First, we tried to set up an analytic platform of tactile signing, and then tentatively clarified tactile signing shared not only the characteristics of visual signing expressed through contact, but also the new characteristics different from visual signed language, though we could not go further due to ongoing COVID 19.

研究分野：手話言語学

キーワード：盲ろう者 触手話 手話学

## 1. 研究開始当初の背景

手話は単なるコミュニケーション手段にとどまらず、ろう社会で使用されている自然言語である。近年、言語として社会に広く認められ(国連「障害者の権利条約」,2006年制定,2014年批准;「障害者基本法」2011年改正,等),言語学的な解明も進められつつある。手話言語は、手指の運動だけで構成されるのではなく、表情や口型、また胸の前の空間(手話空間)も用いられ、それらは主に文法的な機能を担う。手話言語はまさに視覚・空間言語と言えよう。手話を使用する聾者が後天的に視覚障害を受けた場合(以下、盲ろう者とする)、触手話(手を互いに接触することによる手話の表出・理解)を使用するようになる。盲ろうの状態は偶発的な事象でなく(例えば、聾者の6%がアッシャー症候群とみられ、途中で視覚障害となる可能性が高い)、手話言語使用者の中で安定した集団を形成している。触手話は手話言語の一変種と見なされるだろう。ただこれまで触手話は盲ろう者の大切なコミュニケーション手段として認められてきたが、我が国ではその言語学的な解明は皆無である。手話学研究が進んだ欧米でも、触手話については視覚から接触モダリティ移行に伴う対話方略の変容など語用論的な研究はある(Mesch, 2001,2013; Emmorey et al,2008)が、言語の中核にある文法的構造の生成・変容に関する研究はほとんどなされていない。また触手話研究では、まずもって触手話データの収集、記録分析方法など、言語コーパス構築のための枠組みが試作段階の状態である。

## 2. 研究の目的

本研究は、まず触手話に関する先行研究の文献的検討を行う。さらに触手話の言語資料を収集・記録するためのプラットフォームの検討を行う。触手話コーパスの構築に関して、欧米では、映像収集・分析のためのフリーソフト「ELAN」を主に用いている。本研究でも、これの活用も検討する。これをもとに、触手話の言語資料を収集し、特に言語の中核的構造である文法の分析に焦点をあてる。具体的には手話から触手話への中途過程である、接近手話(弱視状態や視野狭窄により、空間や視覚的要素が制限された手話形式)の分析を合わせて行い、視覚的、空間的文法から接触モダリティへの生成・変容過程を明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

文献調査は、研究データベース、関連する雑誌等の検索を行う。触手話分析のプラットフォームの検討や実際の触手話資料の収集・記録・分析に関しては、十分な先行事例がないため、試行錯誤で行わざるをえない。文献等による事例から分析のプラットフォームの試作・検討を行った。また触手話の資料は、近隣の盲ろう者団体に依頼を行った。研究目的の説明を行い、適切な盲ろう者を紹介してもらった。研究目的から、様々な経験(失明の時期や失明以前の手話の経験など)を持った者とした。コロナ禍の影響で、十分な協力者の確保が難しかったが、7名の協力者を得ることができた。盲ろう者団体の会議室等で、2にずつのペアになってもらい、自由な会話をビデオ収録した。

(実際の触手話会話の分析は、コロナ禍の影響で、現在のところ断片的で、十分にできていない。そのため以下の報告では、文献的検討のみとし、紙面の関係で文法的項目のみとする)

## 4. 研究成果

### (1)文法構造の変容

手話言語はもともと視覚的言語であり、また空間的言語である。盲ろう者の知覚的な制約により、新たに触覚モードに移行する場合、文法構造にどのような変容をもたらすのだろうか？

#### 非手指要素

まずうなづきや首振り(否定辞)など、通常、手話言語では非手指的要素を用いるが、触手話ではどのように表現されているのだろうか？Frankel(2002)は、触アメリカ手話で否定辞がどのように伝えられるかを分析している。分析対象は盲ろう者に対する触手話通訳場面 30分間(通訳者2人)であり、28の否定辞が抽出された。通常のアメリカ手話では首振りか否定辞として用いられているが、通訳者は首振りではなく、手による手話単語、例えば#NO(指文字を基にした手話単語)やNOTが用いられていたことを報告している。ただ2人の通訳者の違いも示されている。ただこれがどのような契機によるのかの分析はなく、個別的、記述的な研究の域を脱していない。

Petronio & Dively(2006)も非手指要素であるうなづきや首振りが触アメリカ手話でどのように表現されているかを調べた。YESとNOに関連する1553の事例を抽出し、12の機能に分類した。分析の結果、YES/#NOの頻度はvisibility条件と逆相関していること(見えにくくなるほど、手指による表現が用いられる)、個人差があること(性や触手話を使い始めた年齢など)、機能に関しては、触手話と通常の手話で共通していることが明らかになった。

Collins & Petronio (1998) は、アメリカ手話と触アメリカ手話を様々な観点から比較分析を行った。触手話では、非手指要素を使用せず、代わりに手指要素で代替していた。例えば、アメリカ手話では、疑問文は、文法的 表情が必須で、疑問詞など手指要素は義務的でない。これに対し、触アメリカ手話では、もちろん文法的表情は表出されないが、その代わりに、WH 疑問文では、WH 疑問詞が頻出した。また Yes/No 疑問文では、文末に YOU が表示されたり、同様に QUESTION (質問する) という動詞が表示されていた。

Mesch (2001) も触スウェーデン手話の疑問文表現を詳述している。資料から 168 の疑問文が抽出された。スウェーデン手話もアメリカ手話同様、疑問文標識として非手指要素(文法的表情)が必須であるが、触スウェーデン手話では用いられなかった。その代わりに、手による様々な疑問文標識が見いだされた。Yes/No 疑問文では、対話の文脈から疑問文であることを示したり、文末の単語が持続・保持されたり、繰り返されたり、ゆっくりとした表現になったり、「質問する」という動詞が文末に追加された。最後の単語が持続され、保持されているとき、相手の返答があり、それらの発話がオーバーラップしていることもあった。文末の単語が持続したり、ゆっくりになったり、保持されたりするのは、発話交替のシグナルでもあり、それらが相手の返答を促すという機能も果たしていると分析している。また触アメリカ手話と同様、YOU を文頭、文中や文末に示す場合も多く見られた。ただ YOU は人称代名詞として平叙文でも一般に用いられるので、これが疑問文標識の役割を担っているとは考え難い。著者は、相手の注意を喚起し、それが返答を促していると分析している。WH 疑問文では、これも触アメリカ手話同様、WH 疑問詞が表出されていた。また触手話の特徴として、文末だけでなく、文頭にも同じ WH 疑問詞が表出される文が多く見られている。また文頭に WH 疑問詞があり、しかも文末に YOU が表出されたり、文末の語が持続される文もあった。また「どれくらい?」(HOW?) の意味で、形容詞対、例えば、深い - 浅い、大きい - 小さいなどを表示する場合もあった。以上、触アメリカ手話と触スウェーデン手話で疑問文を表示する文法的標識についての研究を紹介したが、これらは文法的標識の構造的変容と考えるのか、単に文法的標識が表現できないため、コミュニケーション方略として、盲ろう者が様々な工夫をして表現していると考えなのか、議論する必要がある。

非手指要素は、副詞的表現でも大きな役割を担う。Collins (2004) は触アメリカ手話での副詞的表現を分析した。資料は、2 人の盲ろう者の 50 分間の対話である。284 の副詞的表現(語や句)が抽出され、これを分析した。いずれもアメリカ手話では表情を伴う表現である。284 の表現を、意味的内容から 6 つに分類した。様相/程度 (Manner/Degree)、時間表現 (Time)、持続時間 (Duration)、頻度 (Frequency)、目的 (Purpose)、場所/位置/方向 (Place/Position/Direction) を表す副詞的表現である。これらが触アメリカ手話でどのように表現されたかを分析し、6 つの要素の組み合わせからなることを明らかにした。6 つはいずれも手で表されており、それが相手に接触を通して伝えられていた。まず新たな手話単語で示されていた (Specific or extra sign)。これらは通常のアメリカ手話では表情など非手指要素で示され、手話単語は省略されることが多い。さらに単語の最後の部分が保持されたり (Prolonged hold)、手が緊張したり (Tenseness of the hand)、大きく動きが表現されたり (Extended location)、運動がゆっくり長くなったり (Longer and slower movement) していた。また繰り返されることが多く (Redundancy)、相手からのフィードバックで意味が伝わったかどうか確認されていた。

#### 空間的文法

通常の手話言語での空間使用は、1 つには指さしや CL 表現等による手話空間内の位置の意味付けがある。指さしにより、人称を示したり、空間内の任意の位置に名詞や場所が登録される。その位置を再度指さすことにより、代名詞的な役割を担う。2 つには、ロールシフトがある。手話空間が語り手にとっての意味付けだけでなく、登場人物の観点からの意味付けがなされる。これらの手話空間の使用あるいは空間的文法は触手話でどのように変容するのであろうか? 組織的系統的な分析はなく、ここでも事例的に報告を行っているものが多い。

Quinto-Pozos (2002) は、触手話では、指さしの使用が縮小することを報告している。手話資料は、盲ろう者同士、盲ろう者とろう者、ろう者同士でペアを作り、物語を再述したものである。相手にどのように伝えるか、通常の手話と触手話で比較している。1 つには、ろう者同士であれば、ロールシフトを多用して、相手に物語の内容を伝えていたが、盲ろう者は、ロールシフトをほとんど使用していなかった。また盲ろう者は、指さしを YOU (2 人称代名詞) でしか用いなかった。その代わりに 1 人の盲ろう者は、名前を指文字で伝えていた。もう一人の盲ろう者は、登場人物を GIRL や MOTHER など一般名詞を用いて伝えていた。さらにはこの盲ろう者は、SHE (英語対応手話による人称代名詞) など、英語対応的な手話も用いていた。手話空間の使用は、例えば 1 人の盲ろう者は、屈折動詞を空間的に変化させて用いていたが、もう 1 人の盲ろう者は、空間的な変化は用いず、英語対応的な手話に固執していたという。対象者の人数が少なく、事例的に示すのみで、系統的な分析がなされていない。著者は、空間的な文法が十分に使用できないと、表現があいまいになるので、それを解消するために英語対応的な手話を用いていた可能性があるとして述べている。

Mesch, Raanes, & Ferrara (2015) は、認知言語学の枠組み (Liddell, 2003) から触手話で空間をどのように用いているかを分析した。分析対象は、触ノルウェー手話と触スウェーデン手話のそれぞれの対話資料 (7 時間, 41 分) であった。Liddell の理論によると、通常の手話言語では、現実の身のまわりの物理的空間を手話空間に 2 つの方法でマッピングしている (real

space blending) と考え、1 つを代理ブレンド (surrogate blending: 現実サイズの空間をそのままの大きさで手話空間にマッピング)、もう一つは、描写ブレンド (depicting blends: 縮小サイズの空間を手話空間にマッピング) と名付けた。触手話の資料から、これらに關係する事例を抽出して、報告している。触手話特有の現象として、まず手話空間が重なっていた。そして自身の身体だけでなく、他者の身体も活用して語りがなされていた。例えば、「こんなにたくさん桃がなっていた」状況を表現するために、相手の手を上に繰り返しかざして、それを表現していた。また「こんなふうに表面がざらざらしていた」を表現するために、相手の手をなでる行為で、それを表現していた。通常の手話では、どんなふうに見えるかを中心に表現しようとするのに対して、触手話では触覚的にどんな感じがするか (tactically iconic) を表現しようとすることも議論されていた。

Mesch (2006) は、触手話によるナラティブ (自分や他者の経験を話す) の分析を行っている。視覚的な手話言語では、ロールシフトなど、視線の変化によりパースペクティブを表現して、例えば、語り手から他者に変化したりする。触手話では、まずトピックを導入するために、名詞を表現して、なおかつ相手からフィードバックを要求する。うまく伝わっていることが確認されると、そのトピックに関して話を続けていた。また引用的な対話 (Constructed dialogue: 1 人称が語り手でなく、登場人物による対話) では、手の動きの質を変えて、複数の登場人物を区別して表現していた。またパースペクティブの変化は、視線でなく指さしであったり、固有名詞により設定されていたりした。ただこの論文は、学会報告の要約であり、これ以上の詳細な記述はなかった。

文法的な変容に関する研究では、いずれにおいても新たな文法構造の生成と言うよりも、触手話話者がこんなふうに工夫してコミュニケーションを行っているという事例的な記述が主流であった。また個人間である程度の共通性は見られるが、あくまでも個人レベルでの変容の記述の段階と言えるのかもしれない。ただこれらが触手話話者グループの中で共有化され、慣習化され、ある意味文化化が進行するようになるのかもしれない。そこでは盲ろう者同士の濃密な話者集団化という社会過程を経る必要がある。ろう者から盲ろう者となったとき、1 つにはそれまで関わってきたろう者集団との関わりを維持 (視覚的な手話に手で触れる) し、触手話通訳を経ての情報の入手がある。ただそこでは往々にして一方向的な情報提供がなされるにとどまり、対話性の欠如が指摘できるのかもしれない。触手話の発展において他の盲ろう者との出会いと盲ろう者同士の関わりをの深化が不可欠であろう。

## (2) 新たな言語の視点

触手話 (例えば、触アメリカ手話) は手話言語 (例えば、アメリカ手話) の 1 つのバリエーションと考えられてきた。これに対して、Collins & Petronio (1998) は、触アメリカ手話は本当にアメリカ手話と言えるかと疑問を投げかけている。触アメリカ手話の特徴をアメリカ手話と比較しながら広範囲に分析し、covert 要素が overt になっている (例えば、Yes/No 疑問標識が、明示的に文末の手話単語 QUESTION を示されたり、WH 疑問標識 (表情) が明示的に WH 詞として示されている) ことを示した。ただこれら特徴は、英語対応手話 (Signed English) の特徴とも共通しており、触手指英語 (Tactile signed English) としての観点も必要ではないかと議論している。

触手話が、手話言語から新たな言語として歩みだしているとの点からも研究が進められている。Edwards (2014a, 2014b, 2015, 2017) は、ある盲ろう者の置かれた社会的な事象を契機に、アメリカ手話のバリエーションとしての触手話から新たな言語としての触手話に移行しつつあると主張している。その契機となったのは、pro-tactile 運動である。米国シアトル市で、盲ろう者たちが通訳を介さず自分たちだけで直接対話や共同実践を、ワークショップ形式で行う取り組みを開始した。それまでは盲ろう者は、視覚的な障害を得たことにより、常に触手話通訳者を介して、元の手話の世界に関わっていた。ただ手話は視覚的な世界のものであるので、触手話を介した関わりは非常に制限されたものにならざるを得ない。pro-tactile 運動は、そのような触覚を通して視覚世界に限定的に関わるのではなく、(通訳者を介せず) 盲ろう者同士の深い関わりの中で触覚の世界を新たに構築する試みである。そのような取り組みを通して、触手話自体に変化がもたらされ、まさに新たな言語を生み出しつつあるというのがその主張である。

Edwards は、2007 年に始まった pro-tactile 運動に関わり、その後 10 年以上に渡り、盲ろう者の社会、触手話の変容を追いかけ続けてきた。いくつかの社会的、言語的変容を報告している (Edwards, 2014)。例えば、この運動以前は、盲ろう者に常に通訳者が配置され、視覚的な世界の事象が触覚的に伝えられ、それがかえって盲ろう者同士の距離を広げていた。この運動以降、盲ろう者同士の関わりが深まり、その中でこれまで見られなかった創造的な触覚の使用が広がった。また盲ろう者同士の工夫により、三者間の対話も可能となり、社会的關係が変化してきた。また言語的には、非優勢手の役割が変化してきた (片手受信のため使用しなかったり、あるいは相手の身体が非優勢手の役割を担ったり、両手がともに優勢手の役割を担ったり)。また CL 表現が直示的要素 (相手の身体部分を直接利用する) と結合することにより、より複雑になった。これらのプロセスを Edwards は、補償過程から創発過程へと質的な転換がなされたと議論している。すなわち、補償過程とは、消失した感覚を別の感覚で補うプロセスで、例えば、聴覚的な音声言語が聞こえなくなることによる視覚的な補償により口話が出現 (ろう者の場合) したり、同じように視覚的な手話言語が見えなくなることによる触覚的な補償により触手話 (pro-

tactile 運動以前の盲ろう者)が出現したが、いずれも伝えられる内容の複雑性が縮小している。創発過程では、視覚的な補償でなく視覚的な創発により手話言語が生まれたり(ろう者の場合)、同様に触覚的な創発により、触手話(pro-tactile 運動以降)の複雑性が増大したと考える。

Edwards(2015)では、触手話の直示的表現についてさらに考察を深めている。通常の手話言語では、指さしにより話者間で指示物が共有される。触手話でも当初指さしが使用される(あるいは触手話通訳で)が、何を指示しているかあいまい性が生じる。あいまい性を解消するために、指さしの使用が減少し、代わりに具体物(例えば、相手の手など身体部分であったり、手近かにあるナプキンなどの具体物)が対話場面に導入され、その上で直示的な関係が表示され、話者間で共有されるようになった。また具体的な話者の行動に関連づけた指示がなされた。例えば、部屋の正面を指示するとき、通常の手話では指を前方に方向づけて差し出す(ユークリッド的な空間を利用)。これに対して、盲ろう者は、実際にどのようにそこに到達するか(壁伝いに、まず右に行き、前方に行き、さらに左に行く)軌跡を具体物上に指し示して方向を指示していた。

Edwards(2017)は、さらに触手話のCL表現の変容について述べている。触覚の活用を促すワークショップで、盲ろう者のペアで物の形態を伝達しあうゲームを行い、その際の触手話による表現方法を分析した。通常の手話言語ではCL表現が駆使される場面である。盲ろう者もCL表現を用いて伝えようとしていたが、直示的な要素がそこに結合していた(deictic integrationと称していた)。例えば、自動車のライターボックスにつける電源チャージャーコードを表現するとき、チャージャー(挿入部分)を中指と人差し指を伸展させた手の形を相手に握らせ、さらにコードは細長いものとクルクルと巻いている様子を別々に手で表現(小指の伸展、拇指で円を作る)していた。通常の手話言語のCL表現よりも複雑で、触覚的に目立つ部分が手で具体的に表現されていたのが特徴的である。このような創発的な表現が、集団の中での継続的な相互交渉の過程で表現形式として慣習化されていくのだろう。これらは通常の手話言語のCL表現に見られない特徴で、このことからpro-tactile運動(盲ろう者同士の相互的な深い関わり)以降の触手話はまさに新たな言語へと踏み出しているのではとEdwardsは主張している。

#### (6)まとめと展望

ここでは、手話学研究が進んでいる欧米を中心に、触手話に関する言語学的研究を、文法的変化、新たな言語の生成という観点からレビューを行った。視覚的な特徴から触覚的特徴にどのように変容していくのか、また触覚的な対話の深まりとともに新たな言語的な特徴が生成していくのかを整理した。ただいずれにおいても事例的な報告、断片的な分析にとどまっている研究が多い。すなわちこれまで手話を使っていて、視覚的な制限を受けたため、「どんなふうに工夫して」コミュニケーションするようになったのかという記述にとどまり、盲ろう者としての触手話の話者集団で、慣習化により、どのように触手話そのものの構造が変容してきたか、またその背景にどのような社会的過程が存在しているのかについては、十分な議論がなされていないと言えよう。

触手話の分析は、映像的な資料を収集して、見てそれを詳細に分析する手法がとられてきた。視覚的な手話同様、ELANを使った言語資料の蓄積や分析も進められている。わが国でもBono et al.(2018)による触手話の記録、言語資料(データベース)化、分析方法の検討に関する報告も特筆すべきであろう。今後、日本の触手話のバリエーションも考慮した言語コーパス資料の蓄積も待たれるところである。ただ触覚的な変化が必ずしも視覚的分析を可能にするとは限らない。また最近、Edwards & Brentari(2019)は、触手話の分析すべき言語形式として単に触覚的な様相だけでなく、その内部感覚的(proprio-ceptive)の様相も重要だと議論している。内部感覚に関連する振る舞い(例えば、相手の腕を緩く握るか、強く握るか)は外部から視覚的に十分に判別することができない。映像資料を外部から詳細に分析するだけでなく、当事者の言語的直感なども加味した分析手法も求められよう。盲ろう者(触手話のネイティブサイナー)自身による言語資料の分析も待たれる。

本研究は、ろうベースの盲ろう者の触手話の言語学的な検討が中心であった。ただこのことは先天性盲ろう児の教育や支援にも重要ではないだろうか?実はこれまで先天性盲ろう児に対して言語入力としての触手話という視点がほとんど議論されてこなかった。少なくとも手話が言語であり、触手話はそのバリエーションであるならば、日本語とは異なるもう1つの言語として機能する可能性もあるだろう。なぜなら盲ろう児にとって、触覚を用いる点では、唯一バリアフリーな言語と言えるからである。先天性盲ろう児の早期からの言語入力として触手話が検討されてしかるべきだろう。またその際には、言語入力を担う者として成人盲ろう者自身(ネイティブサイナー)の役割も考慮されねばならないだろう。いずれにせよ、今後触手話の言語学的な解明が進むことにより、先天性盲ろう児への言語教育の新たな展開が求められよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鳥越隆士	4. 巻 56
2. 論文標題 盲ろう者の触手話に関する手話学的検討：文献的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 兵庫教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 56, 69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------